

37年間にわたる芦浜原子力発電所をめぐる 争いから持続可能な社会の在り方について考える

高藤 眞意、本藤 比奈、後藤 歩美、福井 志穂子、金 昭延
村吉 由衣、横田 藍、用貝 大樹、織田 耕次、大西 真理菜
松山 哲太、齋藤 智哉、西尾 佳菜子、荻野 智恵、廣橋 さおり

はじめに

私たちのゼミでは、主に途上国への国際協力について学んでいる。国際協力の場面では、支援側の思い込みにより現場の状況や、その地域住民の意思決定を軽視したやり方で支援を進めていくということがありがちである。そのため、支援側の一方的な思い込みから脱却し、それぞれの地域が大切にしているものや、地域住民の意志決定を尊重することは、非常に大切なことだと学んだ。

しかし、この重要なことは、国際協力の場面だけではなく様々な場面にも当てはまることであり、日本国内の社会問題の事例においても通じるのではないだろうか。

今回の我々の研究では、近年日本が抱える大きな課題の1つである原発問題を取り上げ、原子力発電所が立地計画地として指定される地域の現状を把握し、それらに対する地域住民の関わり方から原子力発電の抱える問題について理解を深めることとした。今回の研究対象地は、芦浜原子力発電所の建設計画問題により37年間も住民間の闘争が続き、今なお住民間に傷跡が残っている三重県度会郡大紀町、南伊勢町、それらの町をまたぐ芦浜海岸とした。

芦浜には、1963年に原発建設計画が持ち上がったが、地域の住民が結果的にこれを阻止した。その過程でどのような取り組みがされたのかを関係者から直接伺うことで、地域の意思疎通の重要性と、それに関連する諸課題について考察することとする。

1日目は、鳥羽市内にある「海の博物館」にて、柴原洋一氏からオリエンテーションとして「37年間に渡る芦浜闘争」を歴史から現在の状況について

学び、三重県度会郡南伊勢町にて方座浦漁業協同組合（以下、漁協）の漁民の方々を中心に芦浜原発誘致問題について伺った。

2日目は、原発立地予定地の芦浜に足を運び、長距離ハイキングを行った。そこでは、芦浜に残されている自然に実際に触れ、同行していただいた地元の方とのコミュニケーションをとりながら自然の偉大さと人間の愚かさについて考えた。

3日目は、三重県度会郡大紀町錦を訪れた。この町は原発誘致賛成派が多かった地である。ここでは、地元で活躍するジャーナリストの北村博司氏から、主にメディアと報道の視点から、当時の様子や課題を伺うことができた。

このような行程の中、原発を「止めた」町・芦浜から、我々が考察した内容を以下にまとめ、今後の社会の在り方を考えていく。

1. 合宿1日目

海の博物館

1963年、三重県南島町（現・南伊勢町）と紀勢町（現・大紀町）にまたがる熊野灘の芦浜に中部電力による原発建設計画がもちあがった。当時南島町の7つの漁協が反対、紀勢町の1つの漁協が賛成に分かれた。ここから37年間にわたる芦浜闘争の歴史が始まる。

1963年から1967年の通称「第一回戦」では漁協と町議会が協力して原発反対対策協議会を作り、デモや集団抗議が行われた。そんな中1966年に南島漁民の船団が、国会議員の芦浜視察船を阻止するという長島事件が起き、翌年田中知事により原発計画は一時終止符を打たれ、第一回戦は反対派の勝利で幕を閉じる。その後約15年は休戦期となっていつ

たが、しかしその間も中部電力は土地を離さずに、交付金をだしにした誘致や買収をし、推進派を増やす工作を続けていたのである。

1984年に田川知事が原発予算3000万円を計上したため「第二回戦」が始まった。第二回戦では中部電力に加えて知事と県議会が推進派に乗り出してきた。反対派では「有志会」と女性を中心とする「母の会」などの住民の自主的な組織が中心となって反対運動を行った。そんな中1985年に南島町の抗議を尻目に三重県議会は「芦浜原発調査推進決議」を強行可決した。反対派は1993年に反対派町議会議員と協力して原発町民投票条例を制定し、原発建設のために有効投票の過半数を制定しなければならないという条件を付けた。それでも計画の推進を進める中部電力に対し、1994年に南島町民2000人による海洋調査受け入れの漁協総会の開催を実力阻止する古和浦事件が起きる。

1995年には原発反対の署名活動が開始され、翌年5月までに約81万人もの署名が集まり、三重県知事に提出された。これは当時の三重県民有権者の過半数にあたる人々が、原発反対の意思表示をしたことになる。これにより知事は計画の休止、再考を決定する。

北川知事は休止期間に芦浜に出向き、町民の声を聞くなどしてこの原発計画により起きた地域破壊の現状を把握しようとした。そして2000年2月22日に北川知事は芦浜原発計画を白紙撤回し、37年に渡る長い闘争が幕を閉じることになった。

漁業関係者は海を守りたいという意思で反対運動をしていたが、同時にお話をお伺いした海の博物館の館長をしてられる石原義剛氏は、海女を例に原発建設による海との持続可能な生活への影響について説かれた。2014年に海女は三重県無形民俗文化財に指定されたが、それは海女が持続可能な漁村社会のモデルとされているからである。私たちがエネルギー問題や原発問題を考えるときに、海女という存在は1つの良い例となると考える。

南島町原発反対の会との交流から

合宿1日目の夜は、南島町の反対派の若者を中心に1992年に結成された「南島町原発反対の会」のメンバーである、中村和人氏と野村五輪夫氏という

方と交流する機会をもった。お二方には、反対の会結成から2000年の原発計画白紙撤回に至るまでの反対運動についてお話を伺った。

1993年から反対派が原発阻止運動を行う中で、推進派により引き起こされた特徴的な出来事が「ハマチバッシング」である。当時は漁民の多くがハマチの養殖に従事していた。推進勢力はその切り崩しを試みており、テレビや週刊誌などのメディアを利用して養殖ハマチは薬漬けで危険だというデマを広め、養殖ハマチの値段を暴落させたのである。その結果、借金を抱え経済的に追い詰められた反対派漁民の多くが、中部電力が懐柔のために配布した金の力で推進派へと転じるようになった。

このように推進勢力は数々の嫌がらせや金銭的誘惑を利用して着実に反対派を推進派へと変えていったため、反対派にとっては苦しい状況が続いていた。1994年12月の古和浦漁協総会では、このまま総会が開かれると海洋調査の受け入れが決定し原発建設が確実になるため、反対派約2000人が集まり、漁協組合を包囲し総会の開会を阻止した。反対派は常に話し合いや議論による、民主的な方法で反対運動を進めてきたが、この総会阻止をはじめ、実力行使を行わなければ原発推進を止められなかったという事実もあった。

南島町における原発反対運動は、特定の政党を支持する団体によって行われたものではなく、「生活を守る」、「大切な海を守る」という地元の人々のごく当たり前の思いから集結したものであることが、この交流からよくわかった。これは非常に重要なことであり、37年間にも渡り原発反対の声を上げ続けた漁民の方々の計り知れない思いこそ、私たちは知らなければならない。

2. 合宿2日目

小倉紀子氏との交流会

合宿2日目は、南島町の反対派の一人として原発建設反対運動に参加していた小倉紀子氏と交流した。小倉氏は、原発建設計画が持ち上がった当初は名古屋にいたが、反対運動に参加するために地元である南島町古和浦に戻って来られた。小倉氏が原発建設に反対した理由は放射能の心配もあったが、それ以前に、村の多くの人々の収入源であった漁業が

成り立たなくなることで、村での生活が壊れることが心配だったことがあった。

お話の中で印象的だったことは「原発はお金との戦いだ」と仰っていたことだった。初めは原発反対派が多かった古和浦の地域だが、電力会社のお金により反対派が釣られ推進派に転じてゆき、住民投票では反対派と推進派の票が半分に分かれるような時さえあった。このように反対派が推進派に転じた最も大きな要因は、生活の経済的な苦しさからであった。反対派から推進派になれば電力会社からの接待などでお金を受け取れたことがあった。また、住民としてしてはいけないことであると知りつつも委任状を10万円で売ることもあったという。

さらに反対派にはお金との戦いだけでなく、推進派からの「嫌がらせとの戦い」もあった。誰の字か分からないようカタカナで書かれた手紙や、頼んでもいない宅急便を送りつけられ、一晩中無言電話をかけられたこともあった。その無言電話の中には、小倉氏自身が反対演説をした際の録音テープを電話越しに流されることもあったという。このように当時は、今となっては思い出したくないような悪質な嫌がらせを受け続けていた。原発計画が持ち出される以前は、古和浦に住む多くの人々の間には血のつながり（親戚関係）があったがため、村全体を1つの家族のようなものだと考えていた。しかし、原発計画が持ち出されてからは、村の住民は推進派・反対派に分断されてしまった。その例として人が亡くなった時、その人が自分と反対の立場であった場合、たとえ兄弟であったとしても喜び、子どもと接する際にも、まず推進派の子か反対派の子か考えるようになってしまったという。また村の子供も小さい時から原発闘争を見てきたので、互いに悪口を言い合うことや、学校でも友達を自らから分けて付き合うこと、互いの親を悪く言うことも少なくなかった。小倉氏はこのようなこともあって、そのまま名古屋にいればよかったかな、原発反対運動のために地元に戻って来なければよかったかなと思った時もあったそうだ。現在は分断されていた住民の関係は少しずつ回復しつつあるが、完全に元の状態に戻ることは難しく、この地域破壊の問題の根深さがうかがえる。

このお話を伺い、本当に大切なことは、今だけを

見るのではなく、未来の世代のことも考えることが大事なのではないかと思った。芦浜原発建設計画において推進派の中にも最初は反対派であった人は何人もいた。その人たちは、お金が無く生活が苦しいことから、今を生きるために原発を選び、将来世代のための海を放棄してしまった。一方で反対派の人々は、どんなに辛い嫌がらせを受けても、お金がもらえなかったとしても、未来を担う子供たちのために海を守り続けた。漁業の町にとって海は生活のために必要不可欠な存在であり、子供たちにも海を残したいという強い思いが決してぶれなかったことが37年間の長い戦いを乗り切った原動力であったといえる。現状や、自分の利益だけを考えるのではなく、将来世代の分までどれだけ考えて行動できるかということの重要性を考えさせられた。

ハイキング～芦浜海岸に向けて～

合宿2日目の午後は、紀勢町の浅間神社を出発地点とし、廣達也氏と柴原洋一氏（前出）と共に陸路で芦浜海岸へ向かった。

浅間神社から出発し約2時間厳しい道のりを歩き、実際に原発が建設されようとしていた芦浜を自分たちの目で確かめることができた。原発の計画は現在、白紙撤回されているが、立地が予定されていた場所は現在も中部電力の社有地であるため、ハイキングコースの分岐点には中部電力の看板が立てられている。しばらくすると、芦浜海岸が見え、砂が堆積して自然にできた海跡湖（芦浜池）も見える。ここは徒歩でしか行くことができない場所である。残念ながら見ることはできなかったが、ここを産卵場所としているウミガメの姿や、数々の生き物や植物、手つかずの自然が残っている。

今はこのような自然豊かな場所として残されているが、かつては原発建設のために海岸すべてコンクリートで埋め立てられ、鉄の塀も立てられる予定であった。このような場所に原発が建設されようとしていたなんて私たちには想像もつかなかったが、この場所は地域の人たちに守られてきたということ強く感じる事ができた。

原発建設予定地に足を踏み入れるということは、本当に貴重な経験であった。私たちはメディアでしか原発の情報を得ることができず、原発のメリット

やデメリットなども表面的なものしか見えていなかったが、地域の人々によって守られ、今まで残されてきた芦浜という場所の大切さを感じることができた。実際に訪れてはじめて心が動かされ、改めて考えさせられた。ハイキングから見えたものを忘れず、伝えていきたい。



図1 2日目のハイキング芦浜海岸にて

3. 合宿3日目

北村博司氏の講演

1975年から2001年まで地方紙「紀州ジャーナル」を発行し、芦浜原発問題を取材し続けたジャーナリストである北村博司氏から、「芦浜闘争とマスメディアとの関わり」という視点からお話を伺った。北村氏は当時のマスメディアの報道はほとんどが嘘であり、マスメディアを頭から信用してはいけないということであった。

まず新聞社の問題点が挙げられる。新聞社の収入は大きく分けて読者からの購読費と企業からの広告費に分けられる。購読費と広告費の理想の割合は5対5であるが、新聞社は広告収入に大きく依存しているのが現状である。芦浜闘争の報道においても新聞社は電力会社から多くの広告収入を得ていたため、電力会社にとって不利になるような原発を批判する記事は書くことが難しかったという。原発建設計画に反対派の住民が多かった古和浦地域の勢力を衰退させるため、その地域の漁業で多くの水揚げ高を誇っていた養殖ハマチの安全性を批判する「ハマチバッシング」がマスメディアによって仕掛けられた。この「ハマチバッシング」によりハマチの値段が暴落し、収入の激減が原因で反対派住民が多かつ

た古和浦地域で推進派が逆転した。このように反対派住民には巨大な資金や権力を持つマスメディアとの戦いがあった。

一方で新聞社のスクープによって情勢が大きく変化することもあった。芦浜原発の建設を一部の地域だけで進めようとしていたことや、推進派の町長が電力会社から賄賂を受け取っていたことは反対派にとって大きな追い風となった。

上述してきたようにメディアの報道の背後には、外部との様々な利害関係が複雑に絡み合っている。したがって新聞やニュース番組を批判的に読むことが重要である。私たちを含め現代の若い世代は新聞をあまり読まず、自分の関心のある情報だけをインターネットから得ていると言われている。若者の新聞離れの原因として北村氏は、新聞社の押し売りや捏造記事の掲載による信頼の低下、また若い層が貧しくなっていることで新聞の購読が難しくなっているということを挙げられた。しかし新聞を読むことでインターネットでは見えてこないマスメディアによる報道の裏側を知ることができる。これからの未来を担う私たち若い世代がメディアリテラシーを養い、正しく情報を取捨選択する力が必要である。



図2 3日目の北村博司氏の講演の様子

まとめ

2日間の合宿を振り返り、重要であると思われることをまとめておく。

まず、国と県によって行われていた原発建設計画が地域を分断し、賛成派・反対派という立場の違いで家族や地域とのつながりが破壊される恐ろしさ、また白紙撤回後も続くわだかまりから感じた問題の

深さである。この計画がその地域に住まう方々の生活を変え、人々のつながりを変えたという衝撃的な事実私たちに学生は打ちのめされ、ショックを受けた。

お話を伺っていく中で、賛成派・反対派、それぞれの立場に理由があり、どちらも否定することはできないということを理解した。お金がなければ生活が成り立たず、次の世代へ漁を引き継ぐことはできないという賛成派の意見、海がないと漁を続けることもできず、次の世代へつなぐことはできないという反対派の意見、どちらの意見が正しいと決めることはできない。賛成派・反対派のどちらも原発建設計画の被害者であり、37年間という月日で築けたはずの人間関係や地域開発へのエネルギーを失わなければならなかった。

日本では原発問題以外にも、沖縄基地問題など地方各地で様々な問題が生じている。私たちは、日本で生じている問題をまるで私たちと関係がないとこ

ろで生じている問題のように、テレビやインターネットなどの画面を通して常に外側の立場から見ている。

現地での反対運動を展開する人々と、その地域以外で運動を見る人々とは、思いに差が生じる。外側から物事を見つめているだけでは、本当にそこで起こっていることを理解することは難しい。現地に足を踏み入れ、そこに住む方々から直接お話を伺うことで初めて、そこで起こっていることの大変さ、恐ろしさ、本当の現実を目の当たりにすることができる。芦浜原発問題にしてもその地域だけの問題ではなく、地域内外全体で考えていくべきだと感じた。

この合宿で、そのことを知らずに生きていることがすごく恐ろしいことだと知り、一歩踏み出し、様々なことを知り、社会の在り方を考え続けなければならなかったと感じた。